

## まとめ

無藤 隆



これから、この大会のまとめということで、3つのお話をさせていただきます。1番目は、学校における飼育動物のあり方について、2番目は、学校の先生と獣医師とのネットワークについて、そして3番目は、動物を飼育することに対する効果・検証について、お話ししたいと思います。

最初に、学校における動物飼育のあり方ということについてです。学校において動物を飼育することが、たとえば、愛玩動物、すなわちペットを飼うということや、野原に出て行って動物と出会うということと異なる要素があると思います。これは、生きものを4つの水準で考えるとわかりやすいと思います。1つは個体として、つまり、具体的な名前を持ったウサギであり、たとえば、Aという個体、Bという個体、Cという個体を区別することです。2番目のレベルというのは、種のレベルでの区別です。

「ウサギ」という種であれば、どの個体も同じで、例えばモルモットとは違います。3番目のレベルは、生物として、非生物との区別です。そして4番目としては、自然物と人工物との区別です。それらが合わさって、「世界」というものになります。

そこで、生物はどのような特徴があるのかといえば、私は「あるものがある」ということだと思います。「あるものがある」というのはどういうことかといいますと、たとえば、「ニワトリにはとさかがある」ということです。人工物は必ずデザイナーがいるわけで、むかしからそうあるわけではない。そして、人工物には必ず明確な目

的や機能があります。それに対して生物自体に目的や機能があるわけではありません。さらに、体内を見ると、生物はそこに器官の組織があり、人工物とは全く異なります。さらに、生物は生態学的なネットワークの中で生きています。

このような分析をしてみると、たとえば、私たちが動物に対して愛情をもつということは、レベルで言えば、個と個の関係だと思えます。他ならぬ私が他ならず犬のぼちを愛玩するのです。それに対して、学校における動物飼育というものは、今あげた4つの水準のどれにも対応し、各々のレベルの体験をすることであると思えます。個としてかわいがりながら、種としての対応をして、生物であることを実感し、自然とは何か分かっていきます。そのもう一つの意味は、人間もまたその4つのレベルで生きている存在だと分かることです。個として存在するのは分かっているわけですが、同時に、人間という種として、また、生物として存在し、自然物としての存在であるのです。このことは、うっかりすると忘れてしまいがちですが、しっかりとこのことを自覚できるようにすることが大切だと思います。そういう意味で、学校飼育動物が教育的な意味をもつのだと思います。

2番目として、学校の教員、獣医師、また保護者等と繋がりをもつということです。現在は、学校と獣医師会との繋がりが全国的に広がっているところではありますが、さらに、それぞれの地域において、教員、獣医師だけではなく、そこに保護者が加わっていく。このような繋がりができると、理想的であると思います。

「動物介在」という言葉が、発表の中で何度も出ました。先ほど申し上げたような視点で言えば、学校における動物飼育の充実・発展のために必要であると思います。それとともに、地域における自然保護であるとか、家庭における愛玩動物のあり方などが、発表の内容としてあったと思います。

3番目に、効果検証の問題ですけれども、今回の発表では、アンケートを行って分析するという試みがあり、とても興味深く聞

かせていただきました。また、子どもたちの作文などによる検証もありました。このような方法によって、効果を検証することが、今後も必要だと思います。また、ある程度標準的な尺度等を作っていければと思います。

共感性を伸ばすということだけでなく、動物園での出会いなども加えた、動物との関わりなども入れていくと、研究が広がっていくと思います。また、動物を飼ったことのない子どもたちのグループと飼ったことがある子どもたちのグループとで、動物園での動物との接し方に対する追跡を行ってみることも良いのではないかと思います。さらに、効果検証ということ言えば、実際に、子どもたちが動物を飼っている様子を観察することも、一つの方法であると思います。実践報告の中で、ウサギを抱っこする様子が変わってきたとかというお話がありました。これを組織的に捉えていけば、子どもたちと動物との関わり方の変化を検証することができるのではないかと思います。あるいは、特別支援教育の中で、

たとえば自閉症的な傾向があるお子さんが、動物と接する中で、見えない心を感じるようになれば、素晴らしいことだと思います。これは、直接言葉として表されるわけではありませんが、抱き方や接し方の中で見て取れることだと思います。それから、さらに難しいことですが、自然科学的な研究者なども、この会に参加していただければ、脳の変化であるとか、様々な生理学的変化なども検証できるようになると思います。さらには、長期縦断的に子どもたちが中学生になったときに、どのような効果が現れるのかということについても、検証できるような気がします。このように、効果検証の方法を組織的にどのように組み立てていくのか、今後の研究が待たれるところであり、学生の皆さんや研究者の方々に大いに期待したいと思っています。

以上、3つの視点からお話をさせていただきました。どうもありがとうございました。

(白梅学園大学大学院教授)

